

## 第2章 シリア内戦と域内大国の動向

### 第1節 まえがき

今井 宏平

#### (1) シリア内戦の構造と現状

2011年3月から始まったシリア内戦は、当初は文字通り、バッシュール・アサド（Bashar al-Assad）政権とアサド政権と対立する反体制派の間の争いであった。しかし、2011年後半には早くも隣国のトルコやイランを巻き込み始めた。さらに2012年から2013年にかけてのアサド政権の化学兵器使用疑惑が浮上すると、バラク・オバマ（Barack Obama）政権下のアメリカ、そしてアメリカとトルコによるアサド政権への攻撃回避を試みたロシアという域外大国もシリア内戦に本格的に関与するようになった。アサド政権の統治能力が減退したことで、シリア国内の非国家主体の動きも活発になった。反体制派と並び、影響力を持ったのがクルド人の勢力でとりわけ戦闘能力に長けた民主統一党（Partiya Yekitiya Demokrat: PYD）とその軍事組織である人民防衛隊（Yekîneyên Parastina Gel: YPG）であった。PYD/YPGは当初、アサド政権とは相互不干渉の形で協力していたが、アサド政権軍が北シリアから撤退した2012年7月以降、北シリアで事実上の自治を展開し始めた。しかし、2014年夏以降、アメリカと同盟関係を構築することになる。その背景には、2014年前半のイスラーム国（Islamic States: IS）の台頭がある。シリア国内でアサド政権以外にISに立ち向かえる戦力を有する組織はPYD/YPG以外に存在していなかったため、アメリカをはじめ、IS打倒を掲げた国々がPYD/YPGを支援した。これにより、PYD/YPGはシリア北部での自治を確固たるものとした。非国家主体としてはISもシリアとイラクの一部の領土を支配し、また、支配地域に自分たちの思想に共鳴する人々を呼び込み、支配地域の住民を管理させるなど、統治を試みた。

このように、シリア国内のアクター、隣接する国家や中東の域内大国、アメリカやロシアなどの域外大国、非国家主体などさまざまな政治主体がシリア内戦に関わり、シリア内戦は複合的な内戦、もしくは世界化した内戦の様相を呈している。しかし、2019年以降、この構図にやや変化が見られた。まず、内戦発生から9年目を迎つつある中で、一時はその統治体制が危ぶまれたアサド政権であったが、2015年9月30日のロシアの本格的な介入以降持ち直し、現在では統治範囲を再び広げつつある。IS、PYD/YPGという非国家主体が域内大国および域外大国の介入によってその規模を大幅に縮小、もしくは自治を手放さざるを得なくなるなど、影響力を弱めている。シリア国外のアクターに目を向けると、域内大国の関与はより深まっている。特に2019年から2020年にかけてトルコはPYD/

YPG、そしてアサド政権と交戦する事態となっている。域外大国に関してはアメリカの関与が低下し、それに比してロシアの影響力が拡大している。これはシリア内戦のみならず、中東全般にも当てはまる。

### (2) 統治範囲を拡大するアサド政権

2013年夏の化学兵器使用疑惑に端を発するアメリカとトルコの攻撃、さらに2015年夏から秋にかけてのISの攻撃、反体制派の攻勢で危機を迎えたアサド政権は、ロシアの介入によって辛うじて生き延びた。その後、ロシアやイラン、さらにレバノンのヒズブッラー（Hizballāh）と協力しながら再び国内での統治領域を拡大した。さらに2019年10月のトルコによる「平和の泉」作戦によって、アメリカとの友好関係にひびが入ったPYD/YPGは、再びアサド政権側と協力することを選んだ。さらに、アサド政権はロシアと協力しながら、ロシアとトルコがアサド政権軍と反体制派の衝突を管理しているイドリブにおいても統治の回復を優位に進めている。こうした状況を鑑みると、アサド政権が内戦前のようにシリア全土を統治することは難しいにしても、国内の多くの部分の統治を請け負う最有力アクターへと振り返ることは時間の問題のように見える。

### (3) 影響力が減じる非国家主体

2019年の2つの事件はシリア内戦における非国家主体の減退を印象付けた。最初の事件は、2019年10月9日から22日までの約2週間、タッルアブヤドからラスルアルアインに至る地域のシリア領内30キロに亘って展開されたトルコの「平和の泉」作戦であった。この作戦の詳細は本章第6節に譲るが、結果としてシリア北東部で自治を展開していたPYD/YPGは同地域からの撤退を余儀なくされた。第2の事件は、その直後に起きた10月26日のISの指導者、バグダーディー（Abu Bakr al-Baghdadi）掃討作戦とそれによる同氏の死亡である。バグダーディーの死亡は、IS壊滅の決定打と思われた。しかし、ISに関しては、バグダーディーの死亡後も一定の影響力を保持しているという見方が強い。2020年1月に国連は、ISが新しい指導者の下でシリアとイラクの国境沿いで再度攻勢に転じようとしているとして警戒することを促している<sup>1</sup>。また、2020年1月3日、イラクにおいて実施された米軍によるイランのイスラーム革命防衛隊（Islamic Revolutionary Guard Corps: IRGC）ゴドゥス軍司令官ガーセム・ソレイマーニー（Qasem Soleimani）将軍の暗殺もISの攻勢の追い風になっていると言われている。

### (4) 域内大国の動向

域内大国の中でもトルコは最も長く国境線を接する隣国ということもあり、シリア内戦には常に深く関与している。2019年10月のクルド勢力を駆逐した「平和の泉」作戦に続

き、2020年3月1日にはイドリブにおいて「春の盾」作戦を始め、アサド政権軍と本格的な交戦に発展していた。また、イランはロシアと共にアサド政権の存続を支え、現状ではロシアほどアサド政権と足並みが揃っていないものの、依然としてシリアにおいて存在感を保っている。それに対して、トルコと同様に反体制派を支援していたサウジアラビアは、復権しつつあるアサド政権の容認の道を探っているものの、アサド政権がイランの革命防衛隊と関係が深いことなどを受け入れられず、煮え切れない対応を取っている。イスラエルはイランとの抗争を見越したうえでシリアへの介入を続けており、この姿勢はイラン系武装勢力がアサド政権を支援し続ける限り、終わりそうにない。

### (5) 域外大国の動向

域外大国の動向としてはロシアの存在感が増し、それに比してアメリカの影響力の減退を印象付けた。内政を重視するドナルド・トランプ（Donald Trump）政権はシリア内戦からの撤退を示唆し、そのことがトルコの「平和の泉」作戦の誘因となった。その「平和の泉」作戦に関しても、アメリカはトルコに対してトランプ大統領の書簡、経済制裁、マイク・ペンス（Mike Pence）副大統領を代表とする訪問団の交渉によってようやく一時的な停戦にこぎつけたのと比較し、ロシアは10月22日にウラジミール・プーチン（Vladimir Putin）大統領がレジェップ・タイイップ・エルドアン（Recep Tayyip Erdoğan）大統領とソチで会談し、正式な停戦を達成した。トルコは冷戦期以降、常にアメリカを最重要視してきたが、トルコ外交研究の大家であるウィリアム・ヘイル（William Hale）も指摘しているように、現状ではトルコはワシントンよりもモスクワの動向を重視するようになっている<sup>2</sup>。アメリカに比べて限られた資源しかないロシアは、中東の地域秩序を構築するほどの力は有していないが、アサド政権の存続を最優先しながら敵対するトルコとも友好関係を結んでシリア内戦をコントロールしつつ、サウジアラビアやイスラエル、エジプトといった親米国とも緊密な関係を構築することで中東秩序にインパクトを与える存在となっている。

### (6) 本章の構成

本章では、以下第2節において、シリア内戦の現状について整理する。第3節から第6節はシリア内戦に大きなインパクトを与える地域大国に焦点を当てる。第3節においてイラン、特にイスラーム革命防衛隊のシリア内戦への関与についてまとめる。第4節ではイスラエルのシリア内戦への関与についてイランとの関係を軸に検討を行う。第5節では、シリア内戦勃発以降のサウジアラビアの対シリア政策に関して概観する。第6節では、2019年10月の北シリアへのトルコの「平和の泉」作戦を検証する。

— 注 —

- <sup>1</sup> United Nations Security Council, *Letter dated 20 January 2020 from the Chair of the Security Council Committee pursuant to resolutions 1267 (1999), 1989 (2011) and 2253 (2015) concerning Islamic State in Iraq and the Levant (Da'esh), Al-Qaida and associated individuals, groups, undertakings and entities addressed to the President of the Security Council* (New York, 2020) <[https://www.un.org/en/ga/search/view\\_doc.asp?symbol=S/2020/53](https://www.un.org/en/ga/search/view_doc.asp?symbol=S/2020/53)>, accessed on March 2, 2020. ISの新しい指導者は、イラクのヤジディー教徒虐殺にも関与したアミル・モハメド・アブドル・ラーマン・マウリ・サルビと見られている。
- <sup>2</sup> William Hale, “Turkey, the U.S., Russia, and the Syrian Civil War,” *Insight Turkey*, Vol. 21, No. 4 (December 2019), pp. 25-40.